

略語形成からみた日本語の超重音節の構造について

著者	桑本 裕二
雑誌名	言語科学論集
巻	2
ページ	25-35
発行年	1998-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/30704

略語形成からみた日本語の超重音節の構造について*

桑本 裕二

キーワード：超重音節，略語，foot binarity，フットの構造，特殊拍

要旨

日本語に見られる略語のうち、もとの語がいわゆる超重音節を含む場合、分節音削除をともなった特殊な形成を行う。超重音節は一般に避けられる傾向が強く、日本語においてもその構造は様々に論じられてきており、その存在を認めない説もある。本稿では、略語形成の分析から、超重音節は存在することの新たな根拠を提示した上で、超重音節の2音節への再構成は、通常は起こらず、フットが bisyllabicity に従うときにのみ許される過程であることを示す。

0. はじめに

本論では、日本語の超重音節 (superheavy syllable) の構造について考察する。超重音節とは、3モーラを含む音節のことで、このようにモーラの多い音節は、一般に Trimoraic Syllable Ban などの制約に従い、出現が極力避けられるという傾向がある。日本語においては、外来語を中心に超重音節を形成しそうな3モーラ連続が少なからず存在する。Tateishi (1994) は、3モーラ連続は2モーラ+1モーラの2音節と解釈し、日本語には超重音節は存在しないとしている。一方、窪蘭 (1994, 1995) は、超重音節の存在を認めており、さらに、アクセント付与の見地から、この超重音節は軽音節+重音節 (1モーラ+2モーラ) の構造に再構成される場合があるとしている。本論では、略語形成の際のフットの形成を考慮した場合、これら先行研究にみられる分割は適当ではなく、超重音節はあくまでも超重音節としてふるまっていることを主張する。加えて、日本語のフットの形成とそれに関わる諸条件についても考える。

1. 日本語の音節量と超重音節

日本語においては、最も基本となる音韻単位はモーラ (mora) であり、音節 (syllable) は、モーラ数の多少に基づく重さ (heaviness) によって分類される。これを窪蘭 (1994) は音節量として定義している。この概念に基づくと、短母音は、長母音 (二重母音も含む) の2倍の重さを持っていると考えることができる。また、日本語に出現可能な閉音節として撥音・促音といった、いわゆる特殊拍要素が coda に来るものが存在するが、この場合、これらの子音はモーラを持っていて、短母音と同じ重さであるとされる (窪蘭 (1994: 9))。こうして、各々の音節は、1モーラ音節である軽音節 (light syllable)、2モーラ音節である重音節 (heavy syllable)、3モーラ音節である超重音節 (superheavy syllable) の3種類に分類される。

- (1) a. 軽音節 : /(C)V/
 え (絵) 、 き (木) 、 と (戸)
 b. 重音節 : /(C)VV, (C)VC/
 ポー[ト]、ほん (本) 、 コッ[ブ]
 c. 超重音節 : /(C)VVC/
 バウン[ド]、ポイン[ト]、サイン、[おばあ]ちゃんっ[こ]

これらの分類のうち、(1c) の超重音節は、日本語においては極力出現が回避される傾向にある。これは、Trimoraic Syllable Ban といわれる、一般性の高い制約に従った結果である。

- (2) Trimoraic Syllable Ban (Mayers (1987), 窪蘭 (1994, 1995) etc.)



さらに、窪蘭 (1994, 1995) によると、超重音節の回避について、3 モーラ音節がもともと日本語に存在しなかったことと、(3) で示すように、外来語の借入の際にもともと超重音節であった単語を重音節に縮約するという現象をその理由の一つにしている。

- (3) Avoidance of superheavy syllables in loanwords

ground → グランド
ounce → オンス
machine → マシン

これら外来の単語に加え、「おばあちゃんっこ (くおばあちゃん+こ)」のような、俗語的と思われる、特定の接尾要素の付加の場合にこの超重音節の現れることがあり、いずれの場合から考えても、3 モーラ連続の出現は有標的であるといえる。

本稿では、(1c) の超重音節のうち、長母音 (含二重母音) + 鼻音からなるものについて、その音節構造を考えるものとする。第4節で、略語形成についてこの音節を分析するが、その前に第2節で日本語のフットについて、また、特殊拍要素を含む語の略語形成について概観する。さらに、第3節では超重音節の構造についての2つの先行研究を紹介し、筆者のとる立場を明らかにする。

2. 日本語のフットの構造と略語形成

日本語のフット (foot) は、2 モーラからなる bimoraic foot であると一般に言われている。この foot binarity の性質は、言葉遊び、ミュージシャンの「ズージャ語⁽¹⁾」といわれる業界用語の形成 (Tateishi (1989), Itô, Kitagawa and Mester (1996))、あるいは、短歌や俳句をはじめとする韻文などの構造から知ることが

できる。略語形成においてもこの性質は機能している。それは、もとになる語から bimoraic foot を単位としてとり出す過程だからである。特に、2つの部分からなる複合語を略して形成される複合語略語では、概略(4)で示されるように、通常 bimoraic foot 2つの構成となっている。(5)が主な例である。

$$(4) \quad [\phi_1[\mu\mu]\mu\mu\cdots]_{\text{word1}} \cdot [\phi_2[\mu\mu]\mu\mu\cdots]_{\text{word2}} \rightarrow \phi_1[\mu\mu]\phi_2[\mu\mu]$$

- (5) ϕ_1 [ゼネ]ラル・ ϕ_2 [コン]トラクター → ゼネコン
 ϕ_1 [ファミ]リー・ ϕ_2 [レス]トラン → ファミレス
 ϕ_1 [ラジ]オ・ ϕ_2 [カセ]ット → ラジカセ
 ϕ_1 [ヘビ]ー・ ϕ_2 [メタ]ル → ヘビメタ
 ϕ_1 [キム]ラ・ ϕ_2 [タク]ヤ → キムタク

なお、この例からは漢語を含むものは除外している。それは、漢語の場合は音韻構造よりも漢字を単位としてしまう傾向が非常に強いからである（例：都市銀行→都銀、四輪駆動→四駆、国民健康保険→国保）。ただし、(5)の例のうち、

「キムタク」は、本来「木村拓哉」という漢字で構成されたものであるにもかかわらず、モーラを単位とした音韻構造に基づいて省略されている。この例は、漢字語の略語形としては例外的とみなしてよいが、この語がTVタレントの愛称という性格をもつから、この場合はもとの語が漢字で構成されているという意識はすでに薄く、そのために漢字の単位を無視した略語形成となったものと思われる⁽²⁾。

もとの単語が特殊拍（撥音を除く）を含む場合の略語形成に関しては、桑本(1998)で述べたとおり、(6a)のように、第2要素がfootを形成しなかったり、(6b)のように特殊拍要素をスキップしてフットが形成されるなど、特殊な形成となっている。

- (6) a. ϕ_1 [テレ]ホン・(カ)ード → テレカ
 ϕ_1 [ポテ]ト・(チ)ップス → ポテチ
 b. ϕ_1 [パ<ー>ソ]ナル・ ϕ_2 [コン]ピュータ → パソコン
 ϕ_1 [アメ]リカン・ ϕ_2 [フ<ツ>ト]ボール → アメフト

テレホン・カード→ ϕ [テレ]カ/* ϕ [テレ] ϕ [カー]にみられるように、 ϕ [カー]というフットが実現されないのは、このフットの foot binarity に関して、モーラは2つあるが音節が1つしかないことが関係している。つまり、モーラに関しては foot binarity が守られているが、音節に関してはこれに従っていないということになる。しかしながら、(7)のような場合には、特殊拍を含んで、2モーラ1音節のフットが形成される略語も存在するため、音節の binarity は破られてもよいこと

になる。つまり、日本語においては、フットの bisyllabicity は働いてはいるものの、bimoraicity ほどには厳格ではないことになる。

- (7) ϕ_1 [ゲー]ム・ ϕ_2 [セン]ター → ゲーセン
 ϕ_1 [パン]ティー・ ϕ_2 [スト]ッキング → パンスト
 ϕ_1 [スケ]ート・ ϕ_2 [ボー]ド → スケボー

以上より、日本語のフットは、モーラに関する foot binarity は必ず守られ、音節に関する foot binarity は守られない場合があることになる。1音節フットの形成は、(7)のように可能な場合がある一方、(6)のように回避される傾向が少なからずあるため、2音節フットよりは安定しないフットであるとみなすことができる。つまり、日本語のフットには軽音節+軽音節型の2音節1フット(8a)と、重音節1つの1音節1フット(8b)の2つの構造のものが存在することになる。(8a)が、何らかの理由で、縮約を受けるなどで実現されない場合はまれであり⁹⁾、(8a)がフットとしては最も安定しているといえる。

- (8) a. bimoraic-bisyllabic foot



type: $\phi [(C)V(C)V]$

- b. bimoraic-monosyllabic foot



type: $\phi [(C)V\bar{V}] / \phi [(C)V\bar{C}]$

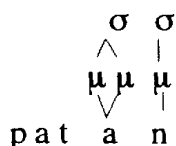
(codaのCは促音・撥音)

3. 3モーラ連続の解釈——先行研究より——

3モーラ連続を、超重音節とみなすのか、それとも2モーラ+1モーラ、あるいは1モーラ+2モーラでなりたつ2音節と解釈するのかについては、議論がわかれるところである。本節では2つの先行研究を紹介し、問題点を指摘する。筆者はあくまでも日本語には超重音節が存在するという立場をとり、それに基づく考察は第4節で行う。

Tateishi (1994) は、日本語には超重音節は存在しないとしている (Tateishi (1994: 100))。Tateishi (1994) によると、3モーラ連続は超重音節を形成するのではなく、2モーラ+1モーラの2音節と分析される。「パターン」の音節構造は(9)のとおりとなる。

- (9)



Tateishi (1994: 98)

これは Tateishi (1994) がアクセント付与に関するデータから導きだしたものであり、以下にふれる窪蘭 (1995) の長音の分割に反論したものである⁴⁾。この場合問題になるのは2つ目の音節 $_{\alpha}[n]$ である。日本語には通常成節的な鼻音は存在しない。日本語における成節的な鼻音は、(10a) のようなブージャ語 (注1 参照) や、カジュアルな日常会話にみられる感嘆詞 (10b) などにみられる程度であって、フォーマルな文体の中にでも自由に存在しうる、本来的な音節だとは考え難い。

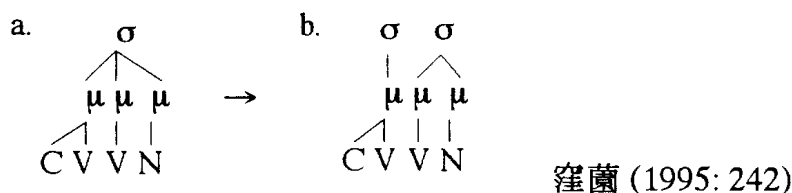
- (10) a. ンーパタ < パターン
 ンスプ < スプーン (例はいずれも立石 (1997) より)
 b. ん? (ものを聞くととき)
 んー (考えこむとき)

一方、窪蘭 (1994, 1995) は超重音節は存在するという立場のもとで、ある環境のもとで2音節に再構成され则认为している (窪蘭 (1995: 240ff.))。自立拍と特殊拍の機能上の差異は、特殊拍がアクセント核を担うことができないということである。つまり、逆にアクセント核を担っているモーラがあれば、音節境界がその直前に存在するということである。

- (11) a. デザ' イン
 b. デザイ' ン博 / *デザ' イン博
 c. デザ' イナー / *デザイ' ナー (' はアクセント核)

「ザイン」が一つの音節であるとすれば、(11b) において「イ」にアクセント核が来ることはなく、「デザ' イン博」が正しい形となるはずである。この場合は「イ」にアクセント核が来ていることから、「イ」が自立拍としてふるまっていることになる。さらに、(11c) のように「ザイ」のような2モーラ連続の場合は「イ」にアクセント核が来ることはないから「ザイ」は2モーラ音節となっている。(11b) から、「イ」の直前に音節境界が来ることになり、超重音節は (12a) から (12b) へ再構成されなければならない。

(12)

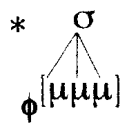


こうして、3モーラ連続が、ある環境のもとでは1モーラ音節+2モーラ音節に分けられ、超重音節の出現が回避されることになる。また、ここでは Tateishi (1994) が示した音節 $_{\alpha}[n]$ もみられない。

4. 超重音節と、これを含む語の略語形成の過程について

日本語における複合語略語は、第2節で触れたが、2モーラ+2モーラの計2フットで成り立つのが原則で、そのうち、もとの語が特殊拍（促音、長音）を含む場合は桑本(1998)で論じたように原則に従わない特殊な形成がなされる。さらに、もとの語が超重音節（3モーラ連続）で始まっている場合は、略語形成はさらに複雑となる。これは、複合語略語形成がもとの語の左はしから2モーラずつをとって1フットを形成するのに対し（第2節(4)）、超重音節は3モーラあるために、超重音節1つ分で既にモーラの foot binarity に違反することになるから、そのままではフットを形成することができないからである。

(13) trimoraic-monosyllabic foot



type: [(C)VVC]

この制約に従うと、超重音節で始まる語を含む複合語が略語を形成する場合、この音節に対して変形が加えられなければならない。

超重音節ではじまる複合語の略語には次のようなものがある。

- (14) a. サウンド・トラック → サントラ/*サウトラ
 ブルー・マウンテン → ブルマン/*ブルマウ
 ワン・バウンド → ワンバン/*ワンバウ
 ノー・カウント → ノーカン/*ノーカウ
 ツー・ダウン → ツーダン/*ツーダウ（野球などでの2アウト）
 メイン・ストリート → メンスト/*メイスト
 b. ストロベリー・コニンズ → ストコン/*ストコー

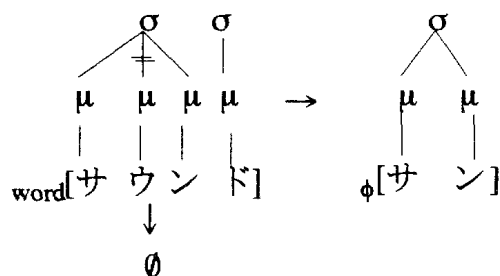
(14a) は、/ウ/、/イ/といった分節音が削除されているが、略語形成において、長音、撥音以外の分節音の削除は、他の環境では通常ないことである⁹⁾。(14b) は長音が回避された結果であるがこの分析は桑本(1998)ですで行った。これらの例が示すように、超重音節ではじまる複合語の略語形成は、第2節(4)の原則には従わない。

ここで、「サウンド・トラック→サントラ」を例に挙げて分析する。「*サウントラ」という形はモーラに関する foot binarity に違反するため出現できないとして、「*サウトラ」が出現できなくて、「サントラ」が選ばれるわけを考えてみたい。

超重音節の存在を認めるとすると、「サウンド・トラック」の前半部分「サウンド」の音節構造は_σ[サウン]_σ[ド]となる。第2節(4)の原則は、語の左はしから2モーラまでをフットにするというものであるが、これに従った場合音節_σ[サ

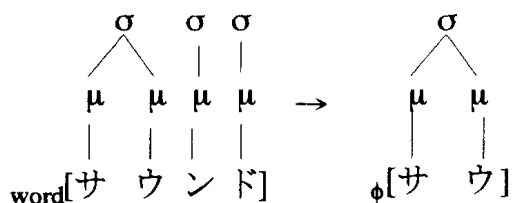
ウン]の内部にフットの境界が表れてしまう。音節 σ [サウン]から分節音削除が起こり(この場合/ウ/) σ [サン]が形成されるとすれば、この2モーラの音節がフットを形成したとき、音節の内部にフットの境界は来ないことになる。略語「サントラ」はこのようにして成り立っているものと考えることができる。これは次の(15)のように示される。

(15) サウンド・トラック → ϕ [サ<ウ>ン] ϕ [トラ]



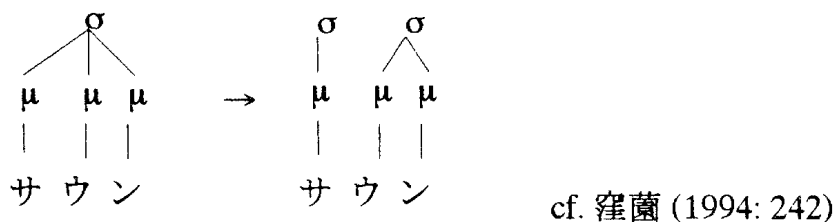
Tateishi (1994) の指摘した、3モーラ連続は超重音節ではなく、2モーラ+1モーラの2音節を形成するという説に従えば、以下のようなになる。つまり、「サウンド」は、 σ [サウ] σ [ン] σ [ド]という音節からなっていることになる。この場合は、語の左端から2モーラである重音節 σ [サウ]を取ってフットを形成することができるため、第2節(4)の略語形成が適用されて、誤った形「*サウトラ」を生じてしまう。

(16) サウンド・トラック → * ϕ [サウ] ϕ [トラ]



窪園 (1995) の提案のうち、超重音節が再構成されとする説に従うと(第3節(12))、超重音節 σ [サウン]は σ [サ] σ [ウン]のように軽音節+重音節の2音節に再構成される。

(17)

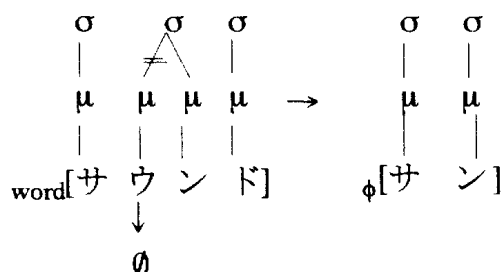


このとき、「サウンド・トラック」の、前半部分「サウンド」は軽音節 (CV) + 重音節 (VN) で始まっていることになる。同じ音節構造で始まる語を含む場合の略語形成は、(18) のように左から2モーラをとるという (4) の原則に従うから、これと同様に、「サウンド・トラック」の「サウンド」からは ϕ [サウ] がフットとなり、略語形「*サウトラ」が誤って形成される。

- (18) 外人・タレント → ガイタレ
 デモンストレーション → デモ

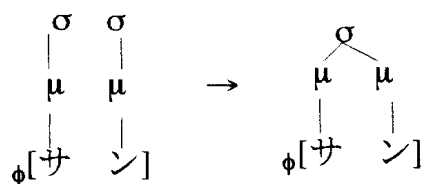
もし仮に、この構造から正しい「サントラ」を生成しようとするれば、第2音節 α [ウン] からの分節音 /ウ/ の削除を考えなければならない。

(19)



この場合、2番目の音節は α [ン] となり、前述したとおり、成節的な鼻音を通常は認めないという立場からすると、さらなる再構成が必要となる。この場合、先行音節 α [サ] と融合し、新しい音節 σ [サン] が形成される。

(20)



この一連の過程をみると、(17) と (20) に見られる、2度の音節の再構成がなされ

ていることになり、超重音節 ϕ [サウン]がもともと分割されない構造に比べるとコストの高い過程となる。以上から、超重音節の1モーラ+2モーラの音節への再構成は起こらないと考えるほうが自然である。

「デザイン」「リバウンド」など、単語の第2モーラめから超重音節となっている語が略語形成に関わるものには次のような例がある。

- (21) アンダー・グラウンド → アングラ/*アングラウ/*アングラン
局・アナウンサー → 局アナ/*局アナウ/*局アナ

「*アングラウ」「*局アナウ」などが成り立たないのはモーラの foot binarity に違反するためであるのは明らかである。「アンダー・グラウンド」の後半部分の音節構造は ϕ [グ] ϕ [ラウン] ϕ [ド]であるが、これから ϕ [グラ]というフットを形成するためには、音節 ϕ [ラウン]に対して ϕ [ラ] ϕ [ウン]のような再構成を考えればよい。こうすれば、フット ϕ [グラ]の右の境界が音節の内部に来ることはなくなる。したがって、この場合、超重音節は、(12)に従って再構成されることになる。

ここで、「サウンド・トラック→サントラ」の場合には超重音節 ϕ [サウン]は分割されることがなかったのに対し、「アンダー・グラウンド→アングラ」の場合では ϕ [ラウン]→ ϕ [ラ] ϕ [ウン]のような再構成がなされる理由を考えてみたい。

「サントラ」の ϕ [サン]、また、誤った形の「*サウトラ」の ϕ [サウ]、「アングラ」の ϕ [グラ]のフットの構造はそれぞれ(22a.i, a.ii, b)が示すとおりとなる。

- (22) a.i. a.ii. b.
- 音節分割: なし

あり

あり

音節に関しての foot binarity を考えると、(22b)のみがこれを満たしており、(22a.i, ii.)はいずれも満たしていない。第2節(8)ですでに示したが、音節に関してのフットの構造は、bisyllabicなもの(8a)の方が monosyllabicなもの(8b)より安定しているといえるので、(22b)ではもっとも安定したフットが形成されることになる。ただしこれは、超重音節の再構成という過程を経ている。これに対し、「サウンド」から選ばれる2種類のフット(22a.i, ii)の構造は、いずれもより安定しない monosyllabic foot である(8b)。つまり、この語からは bisyllabic foot を形成できないことになる。このとき、(22a)が示す2種類の構造のうちでは、音節分割が行われない(22a.i)の方が自然な形だとみなすことができる。以上のことから、超重音節は通常分割されることなくふるまうが、超重音節が2音節に分

割されうるのは、形成されるフットが bisyllabicity に従う場合に限られるということができる。

5. おわりに

本論では、日本語の超重音節の構造について、主に略語形成から考察した。主張する点は以下の3点である。まず1点めは、Trimoraic Syllable Ban のような一般的な制約にもかかわらず、日本語には超重音節が確かに存在するということがある。そして、略語形成においては、通常、2音節に再構成されることはない。2つめの主張は、日本語のフットは bimoraicity を厳格に守り、そのなかでも bisyllabicity に従っているものがより安定したものとして好まれるということである。日本語のフットは2モーラフットとなっているが、特殊拍が略語形成で回避される傾向や、超重音節のフット化の際に、重音節一つのフットよりは軽音節2つのフットが好まれるということを確認した。3つめは、超重音節が2音節に再構成される環境についてである。超重音節が軽音節+重音節のように再構成されるのは、形成されるフットが bisyllabicity に従う場合に限られる。つまり、原則的には再構成されない超重音節は、軽音節+軽音節型のフットの形成のためには2音節に分割されうるということである。そのほかの場合では、「サウンドトラック→サ<ウ>ントラ」の例のように、分節音の削除が起こることになる。これは、ほかの略語形成では通常ありえないことであり、超重音節に特徴的な音韻的ふるまいである。

注

- * 本稿は、言語人文学会第7回大会（於岩手大学）における口頭発表に基づくものである。コメントを頂いたすべての方々、特に都留文科大学高橋幸雄先生に感謝申し上げます。
- (1) もともとはジャズのミュージシャンの間で符牒的に使われている業界用語で、広くテレビなどショービジネスの世界でも使われている。原則的には「マネージャー→ジャーマネ」「コーヒー→ヒーコー」「におい→オイニ」のように、語の前半と後半をひっくり返して作られる。
- (2) この一方で、「後藤久美子→ゴクミ（後久美？）」のように漢字を単位とした省略形もみられる。
- (3) ロイヤル・ホスト→ロイホ/*ロイホス、ポケット・ビスケッツ→ポケビ/*ポケビス（テレビの人気グループ）など、比較的新しいと思われる語を中心に2モーラ2音節フットの形成が回避されている例もある。
- (4) この議論については、立石(1997)を参照。
- (5) ワンダーフォーゲル→ワンゲル、PHS（ピー・エッチ・エス）→ピッチ、エンターテインメント→エンタメ（テレビ番組のコーナーの名称）、などの分析不能で例外的なものも若干観察される。

参考文献

- Itô, Junko, Yoshihisa Kitagawa and Armin Mester (1996) "Prosodic Faithfulness and Correspondence: Evidence from a Japanese Argot," *Journal of East Asian Linguistics*

5, 217-294.

窪蘭晴夫 (1994) 「日本語の音節量について」『国語学』178, 7-17.

窪蘭晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版

桑本裕二 (1998) 「日本語における複合語略語の音韻構造」日本音韻論学会編『音韻研究』第1号, 開拓社, 161-168.

Myers, Scott (1987) "Vowel Shortening in English," *Natural Language and Linguistic Theory* 5: 485-518.

Tateishi, Koichi (1989) "Theoretical Imprecations of the Japanese Musician's Language," *WCCFL* 8, 384-398.

Tateishi, Koichi (1994) "Truly Accented "Syllabic" Consonant? --Binarity and Japanese Syllables--" *Conference Handbook of the 12th National Conference of the English Linguistic Society of Japan*, 12-13 Nov. 1994 at the university of Tokyo, Hongo Campus, 95-100.

立石浩一 (1997) 「日本語東京方言話者におけるアクセントの揺れと音節構造」日本言語学会第115回大会口頭発表予稿集, 1997年10月12日, 於京都大学, 264-269.

——東北大学大学院専門研究員——